西浮通信

令和６年９月３０日
ＮＯ．４０６
東京都北区立西浮間小学校
校長　小島　みつる

言葉で伝える

副校長　冨田　暁子

「暑さ寒さも彼岸まで」の言葉通り、残暑も収まり、過ごしやすい季節になりました。１学期終わりの節目を迎えます。保護者の皆様には、個人面談でお伝えさせていただいた子供たちの頑張りや課題について、ご家庭でもお話しいただき、子供たちが新たな目標や意欲をもち、学校生活をよりよいものにできるよう励ましていただければと思います。

この夏、パリオリンピック・パラリンピックが開催され、感動を呼ぶ名シーンや言葉が数多くあったことは記憶に新しいところだと思います。私は昨年、パラスポーツの伴走や伴泳をされている方からお話を伺い、これまでよりもパラリンピックに関心を寄せていました。その中で、パリで２冠に輝いたパラ競泳の全盲スイマー、木村敬一選手のコーチ星奈津美さんを取り上げたものに目がとまりました。星さんは競泳元日本代表で、オリンピック２大会連続のメダリストでもあります。木村選手からフォームの改良を依頼された星さんは、プールに入り水中で泳ぎを見て改善できそうなところをいくつか見つけます。しかし、改善点を全盲である木村選手に伝えるのが難しかったそうです。身振り手振りではなく、全ての動作を言語化していったそうです。最初は言葉の意味合いが違っていて認識にズレが生じることもあったそうですが、少しずつ言語化することにも慣れていき、自分自身の引き出しが増えたことに気付いたそうです。

西浮間小の授業を見て回っていると、子供たちが自分の考えを出し合い、自他の違いや共通点を知る学習が増えています。また、子供同士の教え合いもあります。教えるということは、自分だけが分かっていることを相手に理解してもらうことですので、より難しい学習となります。言葉を駆使し、時には言い換えや順序も工夫して伝え、相手が分かると教えた子も教えてもらった子もとても嬉しそうにしている場面を目にします。言葉によって自分の考えを伝えるのは簡単なようで、実はかなり難しいものです。

子供たちにとって、さらに難しいのは、自分自身の気持ちを表すことではないかと感じています。感情の種類が大人より少ないわけではなく、どう思っているか、どんな気持ちか、表し方が分からないことが原因であるように思います。私たちの感情は、喜怒哀楽の４つだけではありません。その上、感情の幅もその時々で違っています。大人でも、言葉だけでなく相手の様子を見て、伝わったかどうかやまだ誤解があることが分かるのが常だと思います。学校では、日常生活のやりとりの他、国語や道徳、あらゆる教科学習の中で言葉によって表現することを大切にしています。４年生の教室には喜怒哀楽を表す言葉集めをした掲示物が貼ってあり、また、国語のノートには気持ちを表す言葉の表が張り付けてある学年もあり、いつでも取り出して表現できるようにしてあります。普段つかわない言葉を知り、話したり書いたりする経験を通して言葉を使いこなせるようになるだろうと、取組を様々に行っています。

SNS 等の文字だけのやりとりでは、本当の自分の気持ちを表すことはとても難しく、トラブルになるケースが出てきているのが現状です。その時、どんな風に感じたのか、話すことで相手に伝わり、仲間に対する気持ちや思いやりのある行動につながっていくのではないでしょうか。どのくらい、どのように感じたか、周囲の大人が意図して子供たちの言葉の引き出しを増やしていきたいものです。

１学期間ご協力ありがとうございました。２学期もご支援ご協力をどうぞよろしくお願いいたします。